

木を、季節によつて趣を変えながら、人々をひきつけていた。土堤の斜面を川岸に下ると、さざ波を立てて流れる川は、倒影を沈めて深かつた。水は冷たく、きれいで晴れた日には太陽の光を反射してさざなみが震え、中洲や岸に立つたヨシが、かすかに葉ずれの音をさせた。

雨の日には、川筋一つつむ湿気が、うつとうしく立ちこめて、土堤や川岸を訪れる人々に甘いうれいをかき起した。少し人家がとだえるあたりには、岸から水の上に高床の板小屋をつき出し、一坪の床の上にもつて四ツ手網で鮒や鯉を漁る人がいた。四ツ手の面積は、川筋のせまくなつたあたりでは、ほとんど川中いつぱいを覆えるほどのものがあつた。バケツに数杯の獲物をみたくともある。釣人達の姿もポツポツ見えた。

兩岸の田んぼの埋立て、護岸工事、川底の浚渫等のごとが行なわれ、桜川は時の経過と共に少しづつ素朴さを失つた。

しかし、一方には、川上に浮ぶ貸ボートの数が増え、昭和の始め頃から、年中行事として行われた全国煙火大会の開催地として、沿岸のみにあらず田んぼの中にも

り、周辺から多くの人も呼びよせ、市民遊樂の場としての川筋一帯は大きい魅力をもつていた。航空隊の隊員達の姿も常時見られた。

土浦に出たはじめ、ある友人の家に遊びに行つたとき土間の天井に小さい田舟がつるさされているのを見た。また、土浦に古くから住みついている親類の家の人から、水につかつた稲を刈る話も聞いていた。常磐線の鐵路そのものが霞ヶ浦と土浦の旧市街を隔てる堤防であるとも聞いたし、こゝ門が駅近くのガードのところにあつて、今は市營の駐車場の下に暗渠となつている川が土浦城址と霞ヶ浦を結ぶのを、洪水の時は、そこで仕切る仕掛けとも聞いていた。

そういう土浦はまぎれもない水辺の町、低い町でありながら、少数の大人達以外は、そういうことをふだんは忘れて暮らしていたと思う。

大正十二年の大震災のあとに昭和十三年と十六年と土浦市に戦前二度の洪水がきた。原因は一月降り続いた大雨の結果、桜川の決壊であつた。戦後にも、戦中上流